

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 79

学校名・団体名	大阪市立大和田小学校
HPアドレス	<a href="http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e631365">http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e631365</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	知・徳・体の総合的な学びを通して育成できる資質・能力に関する研究
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>次期小学校学習指導要領では、教科等の学習を通して育成すべき資質・能力の3つの柱が示された。そこでは、教科等を学ぶことでどのような力が身に付くのかを明確にした教育課程の編成が重要であると述べられている。本校では、東京学芸大学次世代教育推進機構の研究を参考に、教科、道徳、体育の学習を通じて育成できる資質・能力を整理する。さらに、指導者が教科の内容や目標だけにとらわれず、資質・能力の育成を柱とした授業改善をできるようにする。</p>	

今年度、児童に育成すべき資質・能力を明確にするために、東京学芸大学次世代教育推進機構の研究を参考に、資質・能力として7つの「汎用的スキル」（批判的思考力、問題解決力、協働する力、伝える力、先を見通す力、感性・表現・創造の力、メタ認知力）と8つの「態度・価値」（愛する力、他者に対する受容・共感・敬意、協力し合う心、よりよい社会への意識、好奇心・探究心、正しくあろうとする心、困難を乗り越える力、向上心）を教科等の学習に位置づけた。これらの資質・能力は、教科等の指導による知識・技能の学びと共に育成できるものと考え、第4学年、第1学年において以下の実践を行った。

1. 6月 第4学年 体育科「かっとばしベースボール（ベースボール型ゲーム）」（全6時間）

事前にとった意識調査を分析すると、技能としては「ねらった場所へ打つ」「きちんと捕球する」「ねらったところへ投げる」ことができるようになりたいと考えていた。学び方については、学び合いや教え合いに対して課題があった。そこで、本単元を通して育成したい資質・能力を次のように設定した。

【汎用的スキル】

- ・「打つ、捕る、投げる」の技能ポイントを課題として取り組む。（問題解決力）
- ・チームの仲間とともに、ゲームを楽しむための規則や簡単な作戦を工夫する。（協働する力、先を見通す力）

【態度・価値】

- ☆仲間とともにチームの課題に取り組み、自分や仲間ができるようになるために協働する。（他者に関する受容・共感・敬意、協力し合う心）
- ・自分たちで作った規則を守ろうとする。（正しくあろうとする心）

技能面の打つ技能を高めるために、上手な子どものフォームをタブレット端末で録画し、ティーに対して立つ場所やバットの振り方、目線などの動画を見ながら教え合えるようにした。技能の高い子どもが、チームの勝利のために教え合いのリーダーとなったり、上達したい子どもがやはりチームの勝利を考えて、教えてもらった動きができるように努力したりする姿に、態度・価値の育ちを見取ることができた。

子ども達が主体的に規則や作戦を工夫できるようになることをねらって、ゲームのコートを工夫した。打てる範囲を狭くしたので、はじめは方向を意識せずに打つことだけを考えていた子どもも、学習が進むにつれ相手の守備位置を見ながら打つ方向を考えたり、打球の強さを変えたりするようになった。そのこと自体が「空いているところをねらって打とう」や「できるだけゴロを打とう」といったチームの課題や作戦となって、子ども達の協働する力の育成につながった。また、ルールについて考えさせるために、毎時間の終末に困ったことや変更したいルールについてノートに書かせ、次の時間までに指導者が整理し話し合う素材とした。このことによって、毎時間規則について話し合うことができ、子ども一人一人の思いを全体で共有したうえでルールを追加したり変更したりすることができた。

2. 10月 第4学年 道徳 主題「心と心が通じ合う」 資料「心と心のあくしゅ」（わたしたちの道徳）

事前に子ども達に「親切」について意識調査をしたところ、「親切にしたい」「知らない人に親切にできると思うが子どもの場合だけ」「なかなか勇気が出ない」など、親切にすることは大切だけれど、実際には難しいと考えているようであった。そこで、人と関わるうえでより高い意識をもたせるために次のように、資質・能力を育成したいと考えた。

【汎用的スキル】

- ・自分の考えをつくり、つくりかえ、作り続ける。（批判的思考力）
- ・仲間と交流しながら、よりよい生き方へとつなげる。（協働する力、伝える力）

【態度・価値】

- ☆よりよく生きる心、高みをめざそうとする心を育む。（正しくあろうとする心）
- ・人に優しくしたい、人として正しくありたいという心を育む。（愛する心、他者に対する受容・共感）

授業では、子ども達に自分の行動の結果がどうなるのかという因果性や、自分がされてもよいかという可逆性を問うことで、どのように考え、行動するのがより望ましいかを考えさせたかった。問題解決型の道徳の授業は子ども達にとっても初めての学習であったので、顔を見合いながら話し合いができるように机をコの字型にした。これにより、授業中に前後左右の友達と意見を言い合ったり、発言者はみんなに語りかけたりすることができ、子ども達も意欲的話し合いに参加できていた。今回の資料では、転びそうになったおばあさんに勇気を出して声をかけるが、断られた主人公の行動が本当におばあさんのためになるのか、自分ならどのように行動するのかを考えさせた。子ども達は、はじめは声をかけて助けることがよいと考えていた。しかし、おばあさんはリハビリのために歩いているのだということを資料後半で読み取ってからは、見守るのも親切なのではないかと考え始めた。途中、タブレット端末の投票機能を使い、「声をかける」「見守る」のどちらにみんなの考えが集まっているのかをグラフで見えるようにした。どちらが正解ということではなく、話し合いのはじめと話し合いの途中でみんなの考えが変わるのか、自分の考えをどうするのかを分かりやすくすることができた。

話し合いがある程度進んだところで、「おばあさんの本当の気持ちがわからない時点では、自分は声をかけるのかどうか。（因果性の問題）」についても考えさせた。登場人物の気持ちを考える従来の道徳の授業ではなく、登場人物の立場を想像して考えなければいけない今回の授業では、4年生の子ども達にとって難しさはあるものの話し合う楽しさを感じながら学習できていた。出された意見には、「親切にしたい。」「心配だから声

をかける。」や、「無理そうな時に声をかける。」「じゃまにならないように見守る。」といったものがあった。次に、「自分がおばあさんの立場だったら、声をかけた場合とかけられなかった場合でどう考えるのか。(可逆性の問題)」について話し合った。子ども達からは、「ありがとうと言いたい。」「心配かけてごめんね。」や「練習だからだいじょう。」などといった意見が出た。子ども達は、友達それぞれの考えを共感的に受け取ることができてきていたので、「そういう考え方もあるのか。」「〇〇さんの考えいいね。」「私とは考えが違うな。」など、批判的な思考力が育ってきていた。最後に、子ども達に書かせた感想には、「親切にするって自分が考えていたのとは違う。」「相手の人の気持ちを考えるのは難しい。」「みんなといろいろな意見を言い合えて楽しかった。」などが書かれていた。

### 3. 10月 第4学年 社会科 主題「府内の特色ある地域」(全14時間)

事前に社会科の学習について意識調査をしたところ、「暗記をしないといけないから苦手」「自分の知らないことを身近に感じて学習できない」「言葉が難しい」など、社会科の学習について考えているようであった。そこで、子ども達に関心をもてるような学習課題を設定し、実際に子ども達自らが調べ、考えた結果が子ども達の知識になるために次のように、資質・能力を育成したいと考えた。

#### 【汎用的スキル】

- ・考えたことや理解したことを自分で実感したり、整理したりする。
- ・感じたことや気持ちを伝える力、他者との双方向的なコミュニケーション力を高める。(伝える力)

#### 【態度・価値】

☆人びとの生活をより良いものにしようとする意識や、そのために社会と積極的に関わり、大切なことや良いこと、必要なことを実践する。(よりよい社会への意識)

導入では、子ども達の日常生活で見えるものと、本単元で学習する内容のもの2つを比較することで、本単元の全体の学習課題を子ども達と一緒に設定することにした。(100円均一の包丁と伝統的工芸品堺打刃物や、スーパーで売られているぶどうと柏原ぶどう)その中から、「作っていて工夫していることや苦労していることは何だろう」「これからどのように発展していくのだろうか」等と子ども達が調べたい課題が具体的に出てきた。課題を意識させたことで、子ども達は学習に見通しをもつことができ、予想を立てやすくなった。また、課題を解決するために指導者が配付した資料をただ読むのではなく、課題に対して資料を選択し、自分から情報を入手する姿勢も見られるようになった。

学習内容をわかりやすくするためにICTの活用も工夫した。製造者になったつもりで自分ごとのように考えやすいようにVTRで包丁の製造の過程を実感できるようにした。その際、まとめやすく簡素化できるように、一人一台のタブレット端末で動画を視聴し、自分が調べて分かったことを静止画として保存し、説明を付け加えていった。タブレットで作成した資料を随時保存していくことで、普段のノートとちがった自分だけのわかりやすい電子版のノートを作ることができた。また、このように電子版のノートを作成していくことで、単元末のポスターにまとめる学習をする時に、効果的に活用することができた。

考えた内容を表現する活動を充実していくためには、調べたことを解釈するための時間をしっかりと確保した。また、資料からわかったことや理由を示したり、自分の言葉に言い換えたり、具体例を挙げたりする活動をしたことで、自分の記録ではあるが相手意識をもった表現ができるようになってきた。

学習したことをまとめるために、すごろく作りを行った。子ども達は学習で得た知識や考えたことをグループで相談したり、助言をし合ったりしながらそれぞれ工夫して主体的、協働的に学習することができた。

学習を終えて振り返りをした時に、「初めて知った用語や語句について、今までより容易に覚えることができた」「具体的知識についてわかりやすかった」「学習内容をただノートにまとめるのではなく、自分たちが学習したことから考える学習があって楽しかった」「社会科の学習が好きになった」など、児童の社会科に対する関心・意欲は高くなった。

本実践では、育成すべき資質・能力の中でも、☆を付けた態度面での育ちに特に焦点をあてた。体育科、道徳、社会科それぞれで、「仲間を大切にする」「よりよく生きようとする」「社会(学級集団を含む)と積極的に関わる」などの態度面での育ちは、それぞれの学習内容を越えて子ども達に育っているといえる。校内アンケートの結果を分析すると肯定的な回答が次のようであった。「相談できる友達がいる 95%」「友達の話聞くことができる 97%」「自分の考えを相手に伝えられる 87%」「きまりを守れる 94%」「互いの良さを認め合える 89%」といずれもかなり高い結果を残している。さらに自己肯定感も高く保つことができ、「自分にはよいところがあると思う 82%」と学校の平均 62%を大きく上回った。

しかし、知・徳・体の統合的な学びを通じて育成できる資質・能力のうち汎用的スキルに関しては、教科の特性や学習目標によるところが大きく、今回の実践では問題解決力の部分にのみ見取ることができた。今後、実践を重ねることで、汎用的スキルの面において教科横断的に育成できる力を明らかにしていきたいと考える。さらには、体育科を中心に、「学びに向かう力・人間性等の涵養」の育成についての研究を深めたい。